# ペルペトゥアとフェリキタスの殉教録

ペルペトゥア、サトゥルスと編者
藤遥　制作

# 1〜2章　編者の序と、捕らえられた人々

1:1 信仰の古い模範は、神の恵みをあかしし、人の徳を高めるものです。それが書き記されてきたのは、それを読むことで出来事をいわば目の前に見て、神があがめられ、人が力づけられるためです。それなら、同じく両方の目的にかなう新しい実例も、どうして書き記されないことがあるでしょうか。1:2 少なくとも、こうした新しいものも、いつかは同じように古いものとなり、後の世の人々に必要とされるからです。たとえ今の時代には、古いものを古いというだけで敬う思い込みのために、権威の劣るものと見なされているとしてもです。1:3 しかし、ただひとりの聖霊の一つの力を、時代の古さによって量る人々は、よく考えてみるべきです。むしろ、新しいものほど、終わりに近いものとして、いっそう大いなるものと見なすべきだからです。世の終わりの時代には、恵みがあふれるほど与えられると定められているのです。1:4 主がこう言われるからです。『終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、彼らのむすこ娘は預言をするであろう。わたしの男女の僕たちにも、わたしの霊を注ごう。そして、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう』（使徒二・一七〜一八）。1:5 ですから、わたしたちもまた、預言を認めて敬うように、同じく約束された新しい幻も認め、敬っています。聖霊のほかの力も、教会に備えられたものと考えています。教会には、この同じ聖霊が遣わされました。聖霊は、主が各自に分け与えられるとおりに、すべての人のうちに、あらゆる賜物を授けておられるのです。それで、わたしたちは、どうしてもこれらを書き記し、神の栄光のために朗読して、たたえるのです。信仰が弱いために、あるいは信仰を失いかけて、神の恵みは昔の人々のもとにだけあったと思う人がいてはならないからです。神が人を殉教者にふさわしいとされるのも、啓示にふさわしいとされるのも、昔だけのことではありません。神は、約束されたことをいつも行われるからです。それは、信じない者にはあかしとなり、信じる者には益となります。1:6 兄弟たち、子供たち。わたしたちもまた、『聞いたもの、手でさわったものを、あなたがたにも告げ知らせる』のです（第一ヨハネ一・一、三）。それは、その場にいたあなたがたも、主の栄光を思い起こすためです。また、今、話に聞いて知るあなたがたが、聖なる殉教者たちとの『交わりにあずかる』ためです。そして、彼らを通して、主イエス・キリストとの交わりにあずかるためです。このかたに、栄光と誉れが世々限りなくありますように。アーメン。

2:1 若い洗礼志願者たちが捕らえられました。レウォカトゥスと、その奴隷仲間のフェリキタス、サトゥルニヌスとセクンドゥルスです。その中に、ウィビア・ペルペトゥアもいました。よい家柄に生まれ、自由人にふさわしい教育を受け、身分ある婦人として嫁いでいました。2:2 彼女には、父と母と、二人の兄弟がいました。その一人も、同じく洗礼志願者でした。また、乳飲み子の息子がいました。2:3 彼女自身は、二十二歳ほどでした。ここから先は、彼女が自分の殉教の一部始終を、自分で語ったものです。それは、彼女が自分の手で、自分の考えで書き記して残したとおりのものです。

# 3〜6章　ペルペトゥアの手記、はしごの幻と審問

3:1 わたしがまだ見張りの者たちのもとにいたころのことだ。父は、わたしを思うあまり、言葉でわたしの心を変えさせ、信仰から突き落とそうとし続けていた。わたしは言った。「お父さん、たとえば、そこに置いてある器が見えますか。水差しでも、何でもいいのですが」 父は言った。「見える」 3:2 わたしは父に言った。「それを、それそのものとは別の名で呼ぶことができますか」 父は言った。「できない」 わたしは言った。「それと同じで、わたしも、自分をありのままのもの、つまりキリスト者のほかの名で呼ぶことはできません」 3:3 すると父は、この言葉に怒り、わたしの目をえぐり出そうとして、わたしに飛びかかった。しかし、わたしを痛めつけただけだった。まことに、父は悪魔の理屈もろとも打ち負かされたのだ。 3:4 それから数日、父がいなかったので、わたしは主に感謝した。父がいないことで、わたしはほっとした。 3:5 まさにその数日のうちに、わたしたちは洗礼を受けた。聖霊はわたしに、水からは肉体の忍耐のほかに何も求めてはならないと告げられた。数日後、わたしたちは獄に入れられた。わたしはおびえた。そんな暗闇を、一度も味わったことがなかったからだ。 3:6 ああ、つらい日だった。人が詰め込まれていて、ひどく暑かった。兵士たちには手荒に扱われた。何よりも、そこでは赤ん坊の心配に苦しめられた。 3:7 そのとき、わたしたちに仕えていた祝福された執事テルティウスとポンポニウスが、金を払って取り決めてくれた。わたしたちが数時間、獄の中のもっとよい場所に出され、ひと息つけるようにするためだった。 3:8 それで、みなは獄から出て、思い思いに過ごした。わたしは赤ん坊に乳を飲ませた。赤ん坊は、もう飢えて弱りきっていた。わたしは赤ん坊のことを案じて母に話しかけ、兄弟を力づけ、息子を託した。わたしは身の細る思いだった。家族がわたしのせいで身を細らせているのを見たからだ。 3:9 こうした心配を、わたしは何日も味わった。それから、赤ん坊がわたしと一緒に獄にいられるように許しを得た。すると、わたしはすぐに元気になり、赤ん坊のことでの苦労と心配から解き放たれた。獄は、たちまちわたしにとって宮殿のようになった。ほかのどこよりも、そこにいたいと思うほどだった。

4:1 そのとき、わたしの兄弟がわたしに言った。「尊い姉妹よ、あなたはもう、神から大いにふさわしい者とされています。幻を願い求めれば、受難となるのか、それとも放免となるのかを示していただけるほどです」 4:2 わたしは、自分が主と語り合っていることを知っていた。主の恵みによって、これほど多くのことを経験してきたのだ。それで、わたしは確信をもって約束し、こう言った。「あした、知らせる」 そして、わたしは願い求めた。すると、わたしに次のことが示された。 4:3 わたしは、驚くほど大きな青銅のはしごを見た。それは天にまで届いていた。幅は狭く、一人ずつしか上れなかった。はしごの両側には、あらゆる種類の鉄の刃物が打ち込まれていた。そこには、剣、槍、鉤、曲刀があった。不注意に上ったり、上に目を向けずに上ったりすれば、引き裂かれ、肉が刃物に引っかかるようになっていた。 4:4 はしごの真下には、驚くほど大きな竜が横たわっていた。竜は上る者を待ち伏せし、上らせまいとおどしていた。 4:5 最初に上ったのはサトゥルスだった。サトゥルスは、わたしたちが連行されたときにはその場にいなかった。だが、わたしたちの信仰を育てた人だったので、あとで、わたしたちのために自分から名乗り出たのだった。 4:6 サトゥルスは、はしごの頂まで上ると、振り返って、わたしに言った。「ペルペトゥア、あなたを待っている。だが、あの竜にかまれないように気をつけなさい」 わたしは言った。「イエス・キリストの名によって、竜はわたしに害を加えはしない」 4:7 すると竜は、わたしを恐れるかのように、はしごの真下から、ゆっくりと頭を出した。わたしは、最初の段を踏むようにして、竜の頭を踏みつけた。そして、わたしは上った。 4:8 すると、広大な庭が見えた。その真ん中に、白髪の大柄な人が、羊飼いの身なりで座り、羊の乳を搾っていた。周りには、白い衣を着た幾千もの人々が立っていた。 4:9 その人は頭を上げて、わたしを見つめ、わたしに

言った。「よく来た、子よ」そして、わたしを呼び寄せ、搾っていたチーズを、ひと口ほどわたしにくれた。わたしは両手を合わせてそれを受け、食べた。周りに立つ人々はみな、「アーメン」と言った。4:10 その声の響きで、わたしは目を覚ました。口の中では、まだ何か甘いものを噛んでいた。わたしはすぐに兄弟に話した。わたしたちは、受難が来ることを悟った。そして、わたしたちは、この世にもう何の望みも持たなくなった。

5:1 数日後、わたしたちが審問を受けるというわさが広まった。そこへ、父も町からやって来た。父は悲しみにやつれていた。父はわたしのところに上って来て、わたしを信仰から突き落とそうとして、こう言った。5:2「娘よ、この白髪をあわれんでくれ。父をあわれんでくれ。わたしが、おまえから父と呼ばれるにふさわしいのなら。この手で、おまえをこの花の盛りの年まで育ててきたのなら。兄弟たちのだれよりも、おまえを大事にしてきたのなら。わたしを人々の笑いものにしないでくれ。5:3 おまえの兄弟たちを見てくれ。おまえの母と、母方のおばを見てくれ。おまえの息子を見てくれ。この子は、おまえがいなくなったら生きていけないのだ。5:4 その強情を捨ててくれ。わたしたちみなを滅ぼさないでくれ。おまえの身に何かあったら、わたしたちのだれも、もう人前で自由にものを言えなくなるのだ」5:5 父は、わたしへの情愛から、こう言った。わたしの両手に口づけし、わたしの足もとに身を投げ出した。そして涙ながらに、わたしを「娘」とではなく、「奥様」と呼んだ。5:6 わたしは父のことで心を痛めた。わたしの一族のなかで、父だけが、わたしの受難を喜ばないだろうからだ。わたしは父を力づけて言った。「あの壇の上では、神がお望みになることが起こります。わたしたちは、自分の力のもとにではなく、神の力のもとに置かれているのです。それを知っておいてください」父は悲しみながら、わたしのもとを去った。

6:1 ある日、わたしたちが昼の食事をしていると、突然、審問を受けるために連れ出された。わたしたちは広場に着いた。うわさはすぐに広場の周りに広まり、おびただしい群衆が集まった。6:2 わたしたちは壇に上った。ほかの者たちは尋問を受けて、告白した。そして、わたしの番が来た。すると、父がすぐに、わたしの息子を連れて現れた。父はわたしを段から引きずり下ろし、懇願した。「赤ん坊をあわれんでくれ」6:3 総督代理のヒラリアヌスは、亡くなった地方総督ミヌキウス・ティミニアヌスに代わって、そのとき死刑を言い渡す権を受けていた。そのヒラリアヌスが言った。「おまえの父の白髪をいたわれ。幼い子をいたわれ。皇帝たちの安泰のために、いけにえをささげよ」6:4 わたしは答えた。「しない」ヒラリアヌスが言った。「おまえはキリスト者か」わたしは答えた。「わたしはキリスト者だ」6:5 父がなおも、わたしを突き落とそうとしてそこに立っていたので、ヒラリアヌスは、父を突き落とすように命じた。そして、父は棒で打たれた。わたしは、父の災難を、自分が打たれたかのように痛ましく思った。それほどに、父のみじめな老いが悲しかった。6:6 それから、ヒラリアヌスはわたしたち全員に判決を言い渡し、獣の刑を宣告した。わたしたちは喜びにあふれて獄へ下って行った。6:7 赤ん坊は、わたしから乳を飲むことにも、獄でわたしと一緒にいることにも慣れていた。それで、わたしはすぐに、執事ポンポニウスを父のもとに送り、赤ん坊を求めた。6:8 しかし、父は渡そうとしなかった。すると、神がお望みになったとおりに、赤ん坊はもう乳を欲しがらなくなり、わたしの乳房も熱を持たなくなった。それは、わたしが赤ん坊の心配と乳房の痛みに苦しめられないためだった。

# 7〜10章　ペルペトゥアの手記、ディノクラテスの幻と闘技場の幻

7:1 数日後、わたしたちがみなで祈っていると、祈りの最中に突然、わたしの口から声が出た。わたしはディノクラテスの名を呼んでいた。わたしは驚いた。そのときまで、一度も彼のことが心に浮かんだことがなかったからだ。わたしは彼の身に起きたことを思い出して、悲しんだ。7:2 そして、わたしはすぐに悟った。自分がそれにふさわしい者であり、彼のために願い求めなければならないのだと。わたしは彼のために多くの祈りをささげ、主に向かってうめき始めた。7:3 すると、その夜すぐに、わたしに次のことが示された。7:4 わたしは、ディノクラテスが暗い場所から出て来るのを見た。そこには、ほかにも暗い場所がいくつもあった。彼はひどく暑さに苦しみ、渇いていた。顔は汚れ、顔色は青ざめていた。その顔には、死んだときの傷があった。7:5 このディノクラテスは、わたしの血を分けた兄弟だった。七歳のとき、病気で顔がただれて、むごい死に方をした。その死は、見る人みなが目をそむけるほどだった。7:6 だから、わたしはこの子のために祈ったのだった。わたしと彼とのあいだには、互いに近寄れないほどの大きな隔たりがあった。7:7 また、ディノクラテスのいるその場所には、水のいっぱい入った池があった。池の縁は、その子の背丈よりも高かった。ディノクラテスは、水を飲もうとするかのように背伸びをしていた。7:8 池には水があるのに、縁が高いために彼は飲めずにいたので、わたしは悲しかった。7:9 そこで、わたしは目を覚ました。そして、わたしの兄弟が苦しんでいることを悟った。しかし、わたしは、自分が彼の苦しみの助けになれると信じていた。わたしたちが陣営の獄に移されるまで、わたしは毎日、彼のために祈った。わたしたちは陣営の見世物で戦うことになっていたのだ。そのときは、カイザル・ゲタの誕生日の祝いだった。7:10 わたしは昼も夜も、うめき、涙を流しながら、彼のために祈った。彼がわたしに与えられるためだった。

8:1 わたしたちが足枷につながれていた日に、わたしに次のことが示された。わたしは、前に見たあの場所を見た。ディノクラテスは体がきれいになり、よい衣を着て、涼やかに憩っていた。傷のあったところには、傷跡が見えた。8:2 前に見たあの池は、縁が低くなって、その子のへそまでになっていた。池からは、絶えず水が汲み出されていた。8:3 縁の上には、水のいっぱい入った金の杯があった。ディノクラテスは近寄って、その杯から飲み始めた。杯の水は尽きなかった。8:4 彼は満ち足りると、子供たちがするように、喜んで水で遊び始めた。そこで、わたしは目を覚ました。そのとき、彼が罰から移されたことを悟った。

9:1 それから数日後、兵士で、獄を預かる副官のプデンスは、わたしたちのうちに大きな力があると悟って、わたしたちを重んじ始めた。彼は多くの人を、わたしたちのところに通してくれた。わたしたちと彼らが、互いにひと息つけるようにするためだった。9:2 見世物の日が近づくと、父がわたしのところに入って来た。父は悲しみにやつれていた。父は自分のひげを引き抜いて地面に投げつけ、うつ伏せに身を投げ出した。そして、自分の老いた年を責め、造られたものすべての心を動かすほどの言葉を口にした。9:3 わたしは、父の不幸な老いを思って悲しんだ。

10:1 戦いの前日、わたしは幻の中で見た。執事ポンポニウスがここへ、獄の戸口に来て、激しく戸をたたいていた。10:2 わたしは彼のところに出て行き、戸を開けた。彼は帯を締めない白い衣を着て、手の込んだ履物をはいていた。10:3 彼はわたしに言った。「ペルペトゥア、わたしたちはあなたを待っている。来なさい」そして、わたしの手を取った。わたしたちは、でこぼこした曲がりくねった道を進み始めた。10:4 わたしたちは息を切らせて、やっとのことで円形闘技場に着いた。彼はわたしを闘技場の真ん中に連れて行き、わたしに言った。「恐れることはない。わたしはここであなたと一緒にいて、あなたと共に戦う」そして、彼は去って行った。10:5 見ると、おびただしい群衆が息をのんで見つめていた。わたしは獣の刑を言い渡されたことを知っていたので、わたしに獣が放たれないのを不思議に思った。10:6 すると、見るからに醜いエジプト人が、わたしと

戦うために、助手たちを連れて出て来た。わたしのところにも、美しい若者たちが、わたしの助手として、味方として来た。10:7 わたしは衣を脱がされた。すると、わたしは男になった。味方の者たちは、闘技の前にいつもするように、わたしの体に油をすり込み始めた。向こうでは、あのエジプト人が砂の上を転げ回っていた。10:8 そこへ、驚くほど大きな男が出て来た。円形闘技場のいちばん高いところを越えるほどの背丈だった。帯を締めない衣を着ていた。衣は、胸の真ん中を通る二本の縦縞のあいだが紫だった。金と銀でできた、手の込んだ履物をはいていた。剣闘士の師範のように棒を持ち、金のりんごの実った緑の枝を手にしていた。10:9 男は静まるように求めて、言った。「このエジプト人がこの女に勝てば、剣で女を殺す。この女がこの男に勝てば、この枝を受ける」 そして、男は退いた。10:10 わたしたちは互いに近寄り、こぶしで打ち合い始めた。相手はわたしの足をつかもうとした。しかし、わたしはかかとで相手の顔を打った。10:11 わたしは宙に持ち上げられ、地を踏まないかのようにして、相手を打ち始めた。しかし、なかなか決まらないのを見て、わたしは指と指を差し入れるようにして、両手を組んだ。そして相手の頭をつかむと、相手はうつ伏せに倒れた。わたしは相手の頭を踏みつけた。10:12 群衆は叫び始め、味方の者たちは賛美の歌を歌い始めた。わたしは師範のところへ行って、枝を受け取った。10:13 師範はわたしに口づけし、わたしに言った。「娘よ、平安があなたと共にあるように」 そして、わたしは誉れを受けて、生還の門へ歩き始めた。10:14 そこで、わたしは目を覚ました。そして、わたしが戦う相手は獣ではなく、悪魔なのだと悟った。しかし、勝利がわたしのものであることを知っていた。10:15 見世物の前日までに、わたしがしたことはここまでだ。見世物そのもののできごとは、書きたい人が書けばよい。

# 11〜13章　サトゥルスの幻

11:1 祝福されたサトゥルスも、自分の見たこの幻を公にしました。それは、彼が自分で書き記したものです。11:2 わたしたちは苦しみを受け終えて、肉体から出ていた。そして、四人の天使によって東へ運ばれ始めた。天使たちの手は、わたしたちに触れていなかった。11:3 わたしたちは、あおむけに上を向いた姿で進んだのではない。なだらかな坂を登るようにして進んで行った。11:4 最初の世界を通り過ぎると、わたしたちは計り知れないほどの光を見た。わたしはペルペトゥアに言った。彼女はわたしのそばにいたのだ。「これが、主がわたしたちに約束しておられたものだ。わたしたちは約束のものを受けた」11:5 あの四人の天使に運ばれて行くうちに、わたしたちの前に広々とした場所が現れた。そこは園のようで、ばらの木々と、あらゆる種類の花があった。11:6 木々の高さは糸杉ほどで、その葉は絶え間なく歌っていた[1]。11:7 その園には、ほかの四人の天使がいた。ほかの天使たちよりも輝いていた。彼らはわたしたちを見ると、わたしたちに敬意を表した。そして驚きながら、ほかの天使たちに言った。「この人たちだ。この人たちだ」すると、わたしたちを運んでいた四人の天使は、恐れおのいて、わたしたちを下ろした。11:8 わたしたちは自分の足で、すみれを敷き詰めた走路を渡った[2]。11:9 そこで、わたしたちはヨクンドゥスとサトゥルニヌスとアルタクシウスに会った。彼らは同じ迫害のときに、生きたまま焼かれた人々だ。クィントゥスにも会った。彼も殉教者として、獄の中で世を去った人だ。わたしたちは彼らに、どこにいるのかと尋ねていた。11:10 ほかの天使たちが、わたしたちに言った。「まず来なさい。中に入って、主にごあいさつしなさい」

12:1 わたしたちは、ある場所の近くに来た。その場所の壁は、光で建てられたかのようだった。その場所の戸口の前には、四人の天使が立っていた。天使たちは、入って行く者たちに白い衣を着せた。12:2 わたしたちは中に入った。すると、一つになった声が「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」と、絶え間なく言うのが聞こえた。12:3 そこには、白髪の人のような方が座っておられるのが見えた。その方の髪は雪のように白く、顔は若々しかった。その方の足は見えなかった。12:4 その右と左には四人の長老がいた。その後ろには、ほかに大勢の長老が立っていた。12:5 わたしたちは驚きながら進み入って、御座の前に立った。四人の天使がわたしたちを持ち上げた。わたしたちはその方に口づけした。その方は、御手でわたしたちの顔をなでてくださった。12:6 ほかの長老たちが、わたしたちに言った。「さあ、立とう」わたしたちは立って、平和のあいさつを交わした。長老たちはわたしたちに言った。「行って、遊びなさい」12:7 わたしはペルペトゥアに言った。「あなたは、望んでいたものを手にした」すると、彼女はわたしに言った。「神に感謝する。肉体にあったときに喜びにあふれていたように、今ここでは、もっと喜びにあふれている」

13:1 わたしたちが外に出ると、門の前に、監督オプタトゥスが右に、教師である長老アスパシウスが左にいるのが見えた。二人は離ればなれで、悲しげだった。13:2 二人はわたしたちの足もとに身を投げ出して、言った。「わたしたちのあいだを取り持ってください。あなたがたは出て行って、わたしたちをこのままにして行ったのですから」13:3 わたしたちは二人に言った。「あなたはわたしたちの父、あなたは長老ではありませんか。それなのに、わたしたちの足もとに身を投げ出すのですか」わたしたちは心を動かされ、二人を抱きしめた。13:4 ペルペトゥアはギリシア語で二人と話し始めた。わたしたちは二人を連れて離れ、園のばらの木の下に行った。13:5 わたしたちが二人と話していると、天使たちが二人に言った。「この人たちに、ひと息つかせなさい。あなたがたのあいだに争いがあるなら、互いにゆるし合いなさい」13:6 そう言って、天使たちは二人をうろたえさせた。そして、オプタトゥスに言った。「あなたの民を正しなさい。彼らは、競走場から帰って来て、ひいきの組のことで争う者のようにして、あなたのもとに集まって来るのだから」13:7 わたしたちには、門が閉められようとしているかのように見えた。13:8 そこで、わたしたちは多くの兄弟たちを、また殉教

者たちをも見知るようになった。わたしたちはみな、言い表せないほどの香りに養われた。その香りは、わたしたちを満ち足らせた。そのとき、わたしは喜びのうちに目を覚ました。

## 訳注

1　写本の多くと古い訳は『葉が絶えず散っていた』と読む。
2　ある写本は『広い道を通って』と読む。

# 14〜17章　セクンドゥルスの死、フェリキタスの出産、最後の食事

14:1 以上が、いとも祝福された殉教者サトゥルスとペルペトゥアの、とりわけ際立った幻です。二人が自分で書き記したものです。14:2 セクンドゥルスについては、まだ獄にいるうちに、神がもっと早い死によって彼をこの世から呼び出されました。それは恵みのないことではありませんでした。彼は獣の刑を免れたのです。14:3 それでも、魂ではないにしても、彼の肉体は確かに剣を知りました。

15:1 一方、フェリキタスにも、主の恵みが次のように臨みました。15:2 彼女は、もう身ごもって八か月になっていました。捕らえられたときに、すでに身ごもっていたのです。見世物の日が近づくと、彼女はひどく嘆き悲しみました。おなかの子のために、刑を延ばされるのではないかと恐れたのです。身ごもった女を刑に引き出すことは許されていないからです。また、後になって、ほかの罪人たちに混じって、聖なる罪のない血を流すことになるのも恐れたのです。15:3 共に殉教する仲間たちも、ひどく悲しんでいました。これほどよい仲間を、いわば道連れを、同じ望みの道にひとり残して行くことになるのではないかと恐れたのです。15:4 そこで、彼らは心を一つにして共に嘆き、見世物の三日前に、主に祈りを注ぎ出しました。15:5 祈り終えるとすぐに、陣痛が彼女を襲いました。八か月目の出産は、もともと難しいものです。そのために、彼女が産みの苦しみの中で痛がっていると、牢番の下役の一人が言いました。「今これほど痛がっているおまえが、獣の前に投げ出されたら、どうするのか。いけにえをささげるのを拒んだとき、おまえは獣を侮ったではないか」15:6 彼女は答えました。「今は、わたしが自分の苦しみを苦しんでいる。でも、あそこでは、別の方がわたしの内におられて、わたしのために苦しんでくださる。わたしもその方のために苦しむのだから」15:7 こうして、彼女は女の子を産みました。その子は、ある姉妹が引き取って、自分の娘として育てました。

16:1 聖霊は、見世物そのものの次第を書き記すことを許し、許すことによって、それを望まれました。ですから、これほどの栄光を書き記して仕上げるには、ふさわしくない筆ではありますが、わたしたちはこれを果たします。いとも聖なるペルペトゥアの言いつけとして、いや、むしろ彼女から託された願いとしてです。そこに、彼女の不屈さと心の気高さを示すあかしを、一つ付け加えます。16:2 千卒長は、殉教者たちをかなり厳しく扱いました。ごく愚かな人々の忠告を聞いて、彼らが何かの魔術のまじないで獄から連れ出されはしないかと恐れたからです。そのとき、ペルペトゥアは千卒長に面と向かって答えました。16:3「どうして、せめてわたしたちにひと息つかせてくれないのか。わたしたちは、いとも高貴な罪人なのだ。そう、カイザルの罪人で、そのカイザルの誕生日の祝いに闘うことになっている。それとも、わたしたちが肥えてそこへ引き出されれば、それはあなたの誉れではないのか」16:4 千卒長はたじろぎ、顔を赤らめました。そして、彼らをもっと人間らしく扱うように命じました。それは、彼女の兄弟たちやほかの人々が中に入って、彼らと共にひと息つけるほどの扱いでした。獄の副官自身も、もう信じていたのです。

17:1 前の日のことです。人々が「自由の食事」と呼ぶあの最後の食事を、彼らは、自分たちにかかわるかぎり、自由の食事ではなく愛餐として食べました。そのときも、彼らは同じ不屈さで、群衆にこうした言葉を投げかけました。神の裁きを告げて脅し、自分たちの受難の幸いをあかしし、集まって来る者たちの物見高さをあざけったのです。そして、サトゥルスが言いました。17:2「あすだけでは足りないのか。憎んでいるものを、喜んで見に来るとは。きょうは友で、あすは敵だ。それでも、わたしたちの顔をよく見覚えておきなさい。あの日に、わたしたちを見分けるためだ」17:3 こうして、みな驚き打たれて、そこを去って行きました。そのうちの多くの人が信じました。

# 18〜21章　闘技場の日

18:1 彼らの勝利の日が明けました。彼らは獄から闘技場へ、まるで天へ向かうように進み出ました。喜びにあふれ、顔は美しかったのです。もし震えていたとしても、それは恐れのためではなく、喜びのためでした。18:2 ペルペトゥアは、輝くような足取りで続きました。キリストの妻として、神のいとし子としてです。そして、目の力で、すべての人の視線を伏せさせていました。18:3 フェリキタスも同じでした。獣と闘えるように、無事に産めたことを喜んでいました。血から血へ、産婆から網闘士へと進み、出産の後に、第二の洗礼で身を洗おうとしていたのです。18:4 彼らは門まで連れて行かれ、衣装を着るように強いられました。男たちはサトゥルヌスの祭司の衣装を、女たちはケレスに身をささげた女たちの衣装をです。しかし、あの気高い人は、最後まで不屈さを貫いて拒みました。18:5 彼女はこう言ったのです。「わたしたちが自分からここまで来たのは、わたしたちの自由が覆い隠されないためだ。わたしたちが命を引き渡したのは、こんなことをしないためだ。このことを、わたしたちはあなたがたと取り決めたのだ」18:6 不義が義を認めました。千卒長は、彼らをありのままの姿で、そのまま中へ連れて行くことを許しました。18:7 ペルペトゥアは賛美の歌を歌っていました。もうエジプト人の頭を踏みつけていたのです。レウォカトゥスとサトゥルニヌスとサトゥルスは、見物する群衆を、このことで脅していました。18:8 ヒラリアヌスの目の前まで来ると、彼らは身ぶりとうなずきで、ヒラリアヌスに言い始めました。「あなたはわたしたちを裁く。だが、神があなたを裁かれる」18:9 これに群衆はいきり立ち、獣闘士たちの列の前で、彼らを鞭で打つように求めました。彼らは、主の受難にもいくらかあずかれたことを、確かに喜びました。

19:1 けれども、主は『求めなさい、そうすれば、与えられるであろう』と言われました（ヨハネ一六・二四）。その主が、求める者たちに、それぞれが望んでいた最期をお与えになっていたのです。19:2 というのも、彼らはときどき、自分の殉教について願いを語り合っていました。そのとき、サトゥルニヌスは、あらゆる獣に投げ出されたいと公言していたのです。もちろん、もっと栄光ある冠をかぶるためです。19:3 それで、見世物が始まると、彼は豹に襲われてから呼び戻され[1]、さらに台の上で熊にも痛めつけられました。19:4 一方、サトゥルスは、熊ほど嫌なものはありませんでした。しかし、豹のひとかみでとどめを刺されるものと、もう確信していました。19:5 それで、彼が猪にあてがわれたときには、かえって、彼を猪に縛りつけた獣闘士のほうが、その獣に突き刺されました。その獣闘士は、見世物の日々の後に死にました。サトゥルスは引きずられただけでした。19:6 また、熊に向けて橋の上に縛りつけられたときには、熊が檻から出ようとしませんでした。こうして、サトゥルスは二度目も、無傷のまま呼び戻されました。

20:1 若い女たちには、悪魔がひどく荒い雌牛を用意しました。そのために、ならわしに反して手に入れた雌牛です。獣によってまで、彼女たちの性に張り合ったのです。20:2 それで、二人は裸にされ、網を着せられて、引き出されました。群衆は身震いしました。一人はか弱い若い女で、もう一人は産んだばかりで、乳房から乳が滴っているのを見たからです。20:3 それで、二人は呼び戻され、帯のない衣を着せられました。先にペルペトゥアが放り上げられ、腰から落ちました。20:4 彼女は身を起こして座ると、脇から裂けた下着を、腿を覆うように引き寄せました。痛みよりも、恥じらいを心にかけたのです。20:5 それから、求めて、乱れた髪を留め針で留めました。髪を振り乱して苦しみを受けるのは、殉教者にふさわしくなかったからです。自分の栄光のときに、嘆いているように見えないためです。20:6 こうして彼女は立ち上がりました。そして、フェリキタスが打ち倒されているのを見ると、近づいて手を差し伸べ、彼女を起こしました。20:7 二人は並んで立ちました。群衆のかたくなさも打ち負かされ、二人は生還の門へ呼び戻されました。20:8 そこで、ペルペトゥアは、そのころ洗礼志願者だったルスティクスという人に抱きとめられました。彼はペルペトゥアに付き添って

いたのです。彼女は、眠りから覚めたように、あたりを見回し始めました。それほど、御霊のうちにあって、我を忘れていたのです。そして、みなが驚いている中で言いました。「いつ、あの雌牛のところへ引き出されるのか、わからない」20:9 そして、もう起こったことだと聞いても、自分の体と衣に、痛めつけられた跡をいくつか認めるまでは、信じませんでした。20:10 それから、自分の兄弟とあの洗礼志願者を呼び寄せて、語りかけました。「信仰に立ちなさい。みな互いに愛し合いなさい。わたしたちの受難につまずいてはいけない」

21:1 サトゥルスもまた、別の門で、兵士プデンスを励まして言いました。「要するに、わたしが確信し、予告していたとおり、確かに今まで、どの獣にも触れられなかった。今こそ、心を尽くして信じなさい。見なさい、わたしはあそこへ出て行く。そして、豹のひとかみで、とどめを刺される」21:2 すると、見世物の終わりに豹が放たれ、彼はたちまち、そのひとかみで血にまみれました。それは、戻って来る彼に、群衆が第二の洗礼のあかしを叫び返したほどでした。「無事に洗えたな、無事に洗えたな」21:3 まことに、このように身を洗った人は、確かに無事でした。救われていたのです。21:4 そして、兵士プデンスに言いました。「さようなら。わたしの信仰を覚えていなさい。これらのことが、あなたの心を乱すことなく、かえってあなたを強めるように」21:5 同時に、彼の指から指輪を求め、自分の傷に浸して、遺産として彼に返しました。形見として、また血の記念として、彼に残したのです。21:6 それから、もう息も絶え絶えのまま、ほかの者たちと共に、喉を切るいつもの場所に横たえられました。21:7 群衆は、彼らを真ん中に出せと求めました。剣が体を刺し通すのに、自分の目を人殺しの仲間として添えるためです。彼らは自分から立ち上がり、群衆が望むところへ移りました。その前に、もう互いに口づけを交わしていました。平和のあいさつの儀式によって、殉教を全うするためです。21:8 ほかの者たちは身じろぎもせず、黙って剣を受けました。ましてサトゥルスはそうでした。最初に上った彼は、最初に息を引き取りました。ペルペトゥアを待っていたのです。21:9 一方、ペルペトゥアは、骨のあいだを刺されて叫び声を上げました。痛みをいくらかでも味わうためです。そして、新米の剣闘士の定まらない右手を、自分で自分の喉もとへ導きました。21:10 汚れた霊に恐れられていたこれほどの女性は、自分で望まなければ、ほかのやり方では殺されえなかったのかもしれません。21:11 ああ、いとも勇敢な、いとも祝福された殉教者たち！　ああ、わたしたちの主イエス・キリストの栄光へと、まことに召され、選ばれた人たち！　この栄光をあがめ、たたえ、拝む人は、古いものに劣らないこれらの模範も、教会の徳を高めるために必ず朗読すべきです。新しい力もまた、ただひとりの同じ聖霊が、いつも、今に至るまで働いておられることをあかしするためです。そして、全能の父なる神と、その御子、わたしたちの主イエス・キリストをあかしするためです。このかたに、栄光とはかり知れない権能が世々限りなくありますように。アーメン。

## 訳注

1 ここを『レウォカトゥスと共に』と読む写本と古い訳がある。

# ペルペトゥアとフェリキタスの殉教録

2026年11月23日版
著者　ペルペトゥア、サトゥルスと編者
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/perpetua-and-felicitas/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/perpetua-and-felicitas
全文を、ラテン語原文（Passio sanctarum Perpetuae et Felicitatis）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。